

＜書 評＞

二木 立（日本福祉大学・前代々木病院リハ科）著

医療経済学

臨床医の視角から

大井淑雄（自治医科大学）

医学の日進月歩の変化は医学部における学生教育カリキュラムの内容は、明治以来の絶対授業時間数はあまり変わらないにも拘らず、修正を余儀なくされている。

医療経済学も米国においてはすでに授業に組込まれているわけであり、本邦での教育がその点ではおくれが目立つ。卒前教育のみならず大学病院を中心とした卒業教育の場において医療経済学が真剣に討議されたことはないのではないか。医療保険制度、政府管掌の医療費の制御など、昨今におけるめまぐるしい変革

は決して我が国のみに止まる問題ではなく、欧米世界各国からの相互の影響を受け、また国内の生活水準や文明度に修飾されて現われて来るものである。

そのような意味で毎日第一線で診療し、あるいは教育、研究に従事する者にとって無関心で居られる問題ではないのである。

しかしこのような問題を深く掘り下げた解説的な書物は本邦でお目にかかることがなかった。むしろおそきに失する観さえあるのだが、二木立氏の医療経済学という小冊子は実

に時宜を得たものである。筆者は常日頃綿密な計画の確立と実行でよく知られた“リハビリの二木”であり、その裏付けとなる資料蒐集の情熱はまったく敬意を表せざるを得ず、場合によっては偏執狂的とも思われる程に完全主義の方である。

我々も時折り外国の医療を観察する機会はあるのだが、散漫に終始してしまうことが多い。

医療制度が本邦のものが必ずしも悪いことばかりでないこともわかるし、今後我々の努力、切望しなければならぬ点も示唆するものである。我々の医師は大学人も開業医も全員読むべき良書である。このようにかつて考えたこともなかった神聖な医は仁術の世界にも外界からの荒波が押し寄せているのだということを痛感させられる。

（A5，頁284，1985．8月，¥3,300，医学書院刊）